

大学の学習規律（1）

—— 山口大教育「幼児教育基礎」講義を事例に ——

栗原 昭徳

Learning Rules through a University Lecture (1)

—— A Case Study of the Lecture of “Basics of Early Childhood Education” ——

KUWAHARA Akinori

(Received July 20, 2007)

キーワード：学習規律、大学講義、訓育

はじめに

私は、小学校や中学校の授業において教師が指導の対象とすべきことは、次の3つであると考えてきた。それは、

- a. 1時限ごとに変化発展する教科・領域の「学習内容」、
- b. その教科・領域に独自の「学習方法」、
- c. どの教科・領域にも共通する「学習規律」、の3つである。(注1)

大学における「講義」においても、それら3つの指導対象は変わらないと考え、講義を続けてきた。私の担当する「幼児教育基礎」を事例に、そのことを検討してみよう。

まず、第1に挙げた「a. 学習内容」とは、幼児教育基礎でいえば、

- 幼児・保育・「環境を通して」という間接的教育方法などの専門用語とその意味、
- フレーベルや倉橋惣三などの人物名と業績など、
- 学校教育法における幼稚園の位置づけ、幼稚園の目的と目標、幼稚園教育要領の内容、などの、いわば「講義内容」である。その講義内容は、原則として1時限の講義ごとに変化発展していく。同じ講義内容が、同じ学生集団に対して、同じレベルで繰り返されることはない。かならず、講義を経るごとに内容は高度化に向けて変化していくのである。

つぎに、「b. 学習方法」とは、講義内容を習得するときに必要となる、

- 専門書で調べる、保育辞典(事典)を調べるなどの調査研究の手立て、
- 保育場面での子どもの様子を観察して理解し、記録として書きとめる方法など、
- 幼稚園で実際に子どもと一緒に生活をしながら総合的に学習する方法(幼稚園実習)、などの、いわば「学習方法(学び方)」である。全15時限の講義において学生が学習する内容にとどまるのではなくて、幼児教育基礎に関する「ほかの知りたい知識や認識」を学生みずからの手で習得するための「学習方法」が指導されなくてはならない。いわば、学習上の自立を促すために、指導の対象としなくてはならないのが「学習方法」である。

さらに、3つ目の「c. 学習規律」とは、学生たちが自主的、主体的に講義に参加するために必要となる「授業参加のための自主的なルールやマナー」である。たとえば、

○講義の開始までに余裕をもって教室に入る（遅刻をしない）、私語、忘れ物をしない、
○窓開け（換気）、照明、ブラインドの調整、冷暖房の調整など、学習環境を整える、
○意見発表の仕方や聞き方、グループ話し合いの仕方などの言語コミュニケーション技術、
などの、どの講義にも共通する「学習参加のためのルールやマナー」である。

山口大学教育学部において担当している「幼児教育基礎」という講義は、新しく入学してきた幼児教育コース（定員10名）の学生にとっては必修である。そのほかに、小学校教師や特別支援学校教師を志望する学生のうち、幼児教育に関心のある学生たちの多くが受講する。人数は少ないが、音楽、家政、人間教育、心理学を専攻しながら、この講義を受ける学生もいる。この講義は教育学部の専門科目として位置づけられており、幼稚園教諭の免許を取得しようとするれば、必修となる。そのこともあって、入学直後の1年生だけではなく、2・3・4年次の学生も受講する。2007年度の名簿上の受講者数は、1年生が36名、2・3・4年生が22名の、計58名であった。

この「幼児教育基礎」は、例年、月曜日の第1時限目に設定しており、講義は8時40分から始まる。2007年度の場合、4月9日の月曜日から前期の講義が始まることになり、第1時限目の「幼児教育基礎」が学年最初の講義となった。この講義は、週初めの月曜日の1時限目に設定してあるので、学生たちが自分でその気にならないと出席しつづけることはできない。

毎週月曜日の早朝に起床して大学へ行く準備をして、全15回の講義に出席することは努力や真面目さを必要とする。だからこそ、この授業に参加する学生たちには、自主的な授業参加のためのルールやマナーとしての「学習規律」をみずから手で創り出してほしいと願う。また、講義における「学習規律」体験を基にして、学校現場に出たならば、子どもたちの年齢や発達の度合いにふさわしい「学習規律」を育ててほしいとも願う。

大学講義における「学習規律」は、講義ごとに構成員が変わるので、小学校や中学校のように学級集団に「学習規律を育てる」という発想で、どの場面でも継続的に育てることはできない。いわば、たった15回の講義の中で育てるべき「授業参加へのルールやマナー」だと理解してよい。

大学における学習規律の基本も、小学校や中学校の授業と同じように、まずは「遅刻・私語・忘れ物」の克服であると考えよう。

いったん講義を受講しはじめたら、まずは欠席をしないで出席をすることである。遅刻をしないことはもちろんであるが、できれば講義始まりの8時40分までには講義要項を受けとって黙読でもしておくことよい。余裕があれば、さらに、教室の窓開け、ブラインドの調整、点灯などの教室環境を整える仕事にも、学生が自主的に参加してほしいと思う。小中学校における学習規律の例にならうとすれば、大学においても「講義時間に遅刻をしないこと」は、最初にあげられるべき学習規律である。つぎに、いったん講義が始まったならば、勝手な私語は慎むべきであろう。この「私語をしない」が、大学講義においても第2の規律であろうか。第3は、テキストやノートなどの学習用具を忘れないことである。小中学校の例にならうと、**「忘れ物をしない」**という言葉にしておこう。

以下では、大学講義「幼児教育基礎」において私が指導した学習規律の実態や、学生たちの受け取り方や意見を明らかにして、大学授業の教育方法やあるべき講義の姿をも描いてみたい。

1. 講義始まりの様子

a. 第1回講義の始まり

2007年度前期の幼児教育基礎の第1回講義は、入学式やオリエンテーションを終えたあとの、講義開始初日の月曜第1時限であった。私は第1回講義ということもあって、講義室には8時24分に入った。講義開始16分も前なのであるが、すでに6人の学生が来ていた。この学生たちには、さっそく教室環境づくりを手伝ってもらうことになった。講義に参加する学生にとっては、いわば「学習環境づくり」でもある。本論前半の重要な内容となる。

講義開始の8時40分までに講義要項を受け取った学生は44名であった。講義は定刻に始めることにした。定刻後に教室に入った学生は、7名であった。遅刻した学生に対しては、講義の要項や資料も不足していたこともあって、講義終了後に研究室まで来るように伝えた。院生の鈴木さんに、7枚ほどコピーを依頼して、配布する。そして、夕方5時までに、研究室にミニレポートと受講表を持参するように伝えた。遅刻者7名のうち、6名が提出した。結局、受講者は、定刻に間に合った44名、遅刻7名のうちの6名、あらかじめ欠席を伝えていた1名（忌引欠席）の、計51名の受講が、初日の夕刻に明らかになった。

b. 第2回講義の始まりの様子

翌週、4月16日（月曜）の8時18分、教室に入る。すでに8名の学生が来ており、講義室の窓開けがすすんでいる。学生たちは、第1回目の講義開始前に指示した事柄を理解し、覚えていてくれたようだ。私が、教室の蛍光灯のスイッチを入れる。

8時25分、15名。講義開始の定刻までに、49名が講義要項を受け取る。55名の学生が出席、遅刻は6名。当然だが、第1回目の講義に出席していない学生の遅刻が目立つ。

c. 第3回目の講義始まりから終了までの経過

栗原、8時24分に教室に入る。すでに6名の学生が来ており、窓も開けられ、教室の明かりも点灯されている。9番目に受け取った学生が「おはようございます」と挨拶をして入室し、講義要項を受け取る。そのとき「ありがとうございます」という。

8時25分、13名の学生。8時30分、25名。学生たちは、前の席から座っている。

開始定刻の8時40分には、48名が講義要項を受け取る。49～51の3名が遅刻である。

講義は、8時40分から10時02分までの82分間、栗原が語り続けることになる。そのあと、学生にはミニレポートを記入してもらう。テキストの忘れ物は3名。

ミニレポートの提出開始は10時10分。10時17分に、全員の学生が提出しおわる。学生に窓閉めと、消灯を依頼する。栗原、前の電灯を消す。10時18分、教室を退出。

研究室帰着は10時22分。研究室へ帰ったのは、約2時間後である。

d. 第6回講義の始まりの様子

3・4年生たちが教育実習を迎える前の週の5月21日。この日が、全メンバーがそろった最終の講義日であり、平均的な講義日の最後の日でもある。

栗原、8時25分、研究室発。8時28分、教室着。学生たち16名が来ている。もちろん、窓開け、照明の点灯、ブラインドの調整なども終わっている。「教室環境を整える」という学習規律（文字どおりの自主規律）は、かなりの程度定着したと見てよい。

8時30分、学生は24名。8時35分、39名。8時38分、47名。

定刻の8時40分に講義を始める。出席者数は50名、遅刻者は1名である。「遅刻をしない」という学習規律は、ほぼ定着したようである。もちろん、講義が始まっても「私語」はない。ただ、3種類のテキストを使っているので「忘れ物がない」とは断言できないが、講義を進めるうえで支障が出るくらいの忘れ物はないと判断する。講義をする私の方の指示がもっと的確であれば、忘れ物は少なくなると思われる。

新任教師の3つの悩みである「遅刻・私語・忘れ物」は、6回の講義で、ほぼ克服できたと考えてよい。

この「3つの悩み」を克服するための鍵を握っているのが、じつは第1回目の講義を定刻に始める前の「15分間の指導」である。

2. 「幼児教育基礎」講義に入る前に指導したこと

2007年度前期の「幼児教育基礎」は、最初の授業日4月9日（月曜）の1時限目、8時40分にはじまる。しかしながら、栗原は、8時24分に講義の部屋に入った。窓も開けないうちで部屋の中にいる学生たちに向かって「窓を開けなさい」と指示して、私の方は、ふたたび廊下に出て教室のドア前の窓を1枚だけ開ける。もちろん風通しをよくするためである。6人の学生が、すぐに動いてくれた。

学生の一人は、ミニレポートに次のように書いている。

○「私は、いちばん初めの窓について（の説明に）、いきなり驚かされました。普段、何にも気を配っていない自分のことを恥じました。」11（ミニレポ番号）

○「今日の講義を聞き、まず窓を開けたり、教卓の上をきれいにしたりするという気配りができるように、これから注意していきたいと思いました。そして、教職の原点である人の世話をするために、自分自身が、きちんと自立していこうと思いました。」03

○「わたしは、今日の授業を受けて、まず、先生が最初に言われた「窓を開けなさい」という言葉で、「しまった」と思いました。最初に先生とお話させていただいたときにも言われたことだったからです。反省しました。

そして、「教師は気がきくことが大事だ」と言われたことは、とても心に残りました。これからの大学生活で生かし、それを将来、先生になったときに当たり前に行えるようにしようと決めました。」17

○「私が「窓を開けなさい」と言われたのは2回目でした。気がきくような人でないと教職には向かないと言われて、はっとしました。一度言われたことなのに自分は全くできていないと反省しました。」01

以上の2名は、幼児教育コースの1年生である。入学直後の研究室オリエンテーションにおいて、私が最初に注意したことである。

○「去年の後期に先生の「保育内容言葉」を受講させていただいたので、今日は授業開始

前5分前に来て、前期授業の開始という心構えできました。もう一度初心に戻って授業を受けたいと思います。」29

○「昨年後期の「保育内容言葉」を受講させていただきました。この授業では幼児教育の基礎を学ぶということ（なの）で、気をひきしめて臨もうと思っています。前回の授業でも感じたことですが、時間に敏感な子どもを育てるためには、自らが時間に敏感でなければならぬということに改めて感じました。」40、3年生

○「講義前から、「窓を開ける」「ブラインドを下げて直射日光が当たらないようにする」「教卓の上に不必要なものを置かない」など、子どもたちのためにこちら（教師側が）気を付けていなければならないことをおっしゃった。私はそのことに気が付かなかったので、これから大学4年間で人に迷惑をかけず、人の世話ができるようになろうと強く決意した。」25、1年、

○「私の母親は、小学校の先生として働いており、その姿を幼いころから見て、教師がどのような仕事をするか、分かっているつもりでしたが、今日の講義を受けてみて、自分の考えが甘かったことを思いしらされました。

教室に着いたら窓を開けること、教卓の上の物は取り去ること、子どもに直射日光をあてないよう、工夫することなど、よく考えれば当たり前のことなのに、私の頭の中には、教師のやるべき仕事として入っていませんでした。

今後、この講義を受けることで、新たな発見をし、自分の目指す教師の姿が明確に浮かんでくるような気がしました。」04、1年生

○「昨年後期の保育内容言葉でも栗原先生にお世話になり、いつも早く行くと教師に必要な基礎的なことを教えてくださるので、今日も出来るだけ早く行こうと思い、8時20分くらいに教室に入ることができた。すぐに先生が窓を開けること、ブラインドの意味、正しい方法（使い方）を知ることができてよかったです。」15、4年生

○「4年になり初めての授業を受け、身がひきしまりました。オリエンテーションの意味通り、学問への方向付けがなされたように思います。

私は、朝が少し苦手です。授業内で、仕事のできる人は朝が強いという話を聞き、大学生活残り1年、朝の強い人に自分自身を変えてみようと思います。

他の授業でも栗原先生の授業を受けたことがあります。定刻に始まり、私語もなく、緊張感をキープしたまま授業を受けることができるので勉強になります。

私は、7月に小学校の教員採用試験を受けます。来年は現場にいたいので、授業で学んだことを、どう活かすか、考えながら聞いています。」41、4年生

窓開けを指示して、窓を開けてもらったあと、すぐに講義要項と資料（A3版のプリント2枚）を手渡すことにする。8時30分の時点で、15人に配り終えた。

13番目の学生の口から「おはようございます」というあいさつの言葉が聞こえてきた。これを機に、4、5人の学生が「おはようございます」とか、「ありがとうございます」の

挨拶をしはじめた。

ブラインドの開け方については、次のような説明をした。

「ブラインドというのは、私の研究室にブラインドを取り付けてくれた業者に聞いた話ですが、本来は「上げ下げ」をしないのだそうです。羽根の角度だけを変えることで、とり入れる光の量を調節するようです。この紐で羽根の角度を調節して、太陽の直射光は入らないが、明るさは保つようにするのです。

さっそく、この列の人、やってみてください。」

学生たちは、椅子に座ったまま、紐を操作しようとする。

栗原「立って、やりなさい。仕事の構えではありません」と注意することになる。

○「今回の講義を受けて、衝撃でした。まず、「教員」としての心構えの問題です。私は日ざしがあたっていても、自分でカーテンを閉めに行った記憶しかなかったので、先生が、私たちのことを（心配されていることが）実感でき、心打たれました。「教員」になるということは、他の人への気遣いが、意識せずにできること、見返りを求めないお世話ができることなのではないかと感じました。

また、私がいちばん心に残ったことは、先生と生徒の「距離」についてです。たしかに、距離が近くなると、自然とあいさつや言葉が出てきました。今まで気にとめたことがないことばかりで、自分はこの程度の人間だったのかと、思いました。

が、今後の講義を受けていく中で、しっかり吸収していこうと思いました。」 26

さらに、栗原は、教卓の上の、この講義には必要のないもの（パソコンの端末）、チョークの箱、粘着テープ台などを、机の上から下ろして、受講者の目につかないところに移動させた。

8時35分、32名に講義要項と資料を手渡す。

8時38分、栗原「せっかくですから、2枚のプリントを読みはじめたらどうでしょうか」と指示する。

講義開始の定刻、8時40分には44名の学生が着席しおわる。

○「先生にとって大切なこととは、時間を守ることや、歩きながら物を食べないなど、みんなができることなのに、守れない現状があることを知り、まずはそこから自分を見直して生活していきたいと思いました。」 34

○「学校現場でもそうですが、時間を守ることや勉強をする環境等、学習に取り組む以前に大事な姿勢というのを今日の講義の中で改めて気付くことができました。」 33

講義が始まって、栗原が話を進めているのに、教室の前入り口から入室しようとした学生を制止して、廊下で待つように手で合図する。講義は、そのまま続ける。

結果的に、7人が遅刻する。

8時48分ごろ、「要項が足りなくなりました。講義が終わったあとで配布しますので、

教室の後ろで聞いておいてください。」と指示。

そのまま、講義を続行。

第2回目講義から、大きな教室に移動することになる。

あらかじめ、忌引で欠席せざるをえない学生のために、第1回講義を録音する。

9時48分ごろ、講義を終えて、ミニレポートの記入を指示する。

遅刻学生に対して、講義終了後、研究室まで来るように伝える。

院生に、7枚ほどコピーを依頼。夕方5時まで、研究室に持参するよう伝える。

遅刻者7名のうち、6名が提出。受講者は計51名。

3. 第1回講義の要項と資料について

第1回「幼児教育基礎」の講義要項は、以下のとおりである。要項の実物は、A3版用紙の見開きである。ほかに、プロフィールを紹介するための資料プリントも準備した。

07 「幼児教育基礎」(1)

2007.4.9. (月) 8:40 -

栗原昭徳(山大教育幼児)

1. 受講上の注意、講義の始めに

- ①この講義の受講者は教職を志望している学生であることを前提に、講義をします。
教育の現場では、真面目さ、熱心さ、誠実さも「教師の実力」のうちです。
- ②講義は定刻に始めます。
そして、なるべく定刻までに終わることを心がけます。ご協力ください。
- ③講義中の私語は厳禁です。もちろん、講義中の携帯電話も、厳禁です。
気付いたら、注意もします。
- ④毎回、かならず講義要項を配布します。
授業開始前に、必ず自分の手で受け取ってください。
- ⑤要項末尾の「ミニレポート欄」にナンバリングがしてあります。
この数字は、ぜひとも自分で、自分の生活に活かしてください。
- ⑥毎回、ミニレポートを提出してもらいます。
定刻から受講し、レポートを提出して、1回の出席と見なします。
- ⑦今年度は、「講義ノート」の提出を課します。
ノートのとり方、資料の整理の仕方なども、工夫してみてください。
それは、勉強の仕方、研究の仕方にも通じます。けっこう奥が深いですよ。
*栗原の『教養部 講義録』(1965)をお見せしましょう。

2. 「幼児教育基礎」オリエンテーション

a. 学問するとは

- ロゴス (言葉・日本語) を駆使して、
- ロジック (論理) を認識すること、語ること

b. 幼児 教育 基礎

c. オリエンテーション

ついでに、

*学生用語「シンカンコンパ」「オイダシコンパ」「オツコン」

3. 「先生」になるには

a. なるにはシリーズ

b. 「先生」と呼ばれる職業

c. 幼稚園・保育所の先生になるには

d. 小学校の先生になるには

e. 「学校」とは、「先生」とは、「子ども」とは（学校教育法上の定義）

f. 教育の3要素

a.

b.

c.

g. この4月に先生になった人の事例から

①山口市内の公立幼稚園

②ストレートで北九州市の小学校の先生になったO（オー）さん

③山口県内の小学校の先生になったF君

自分の勉強した資料を持参してくれました。

4. 採用試験のこと

a. 時期

4年の7月下旬、小学校採用試験

毎年8月、保育士試験

夏休み明け、幼稚園の先生の採用試験

b. 試験科目、内容など

7. この講義のテキストは、以下のものを使います。

(1) 栗原昭徳編著『子どもの学習力』山口大教育栗原研究室、¥300.

- (2) 栗原昭徳著『マー君の散歩道』ぎょうせい、 ¥1700.
 (3) 文部科学省『幼稚園教育要領』平成10年12月版、 ¥120.
 ¥2100.

次回、(1)を持参しますので、配布する茶封筒に所属・出席番号・指名を明記して¥2000円を入れて、できれば糊付けして持参してください。

テキストは、講義に必要なときに、配布します。

.....キ・リ・ト・リ・セ・ン.....

07「幼児教育基礎」(1) 栗原 2007.4.9. (月) 8:40 -

() 学年、() コース、() 番、氏名 ()

(記入スペースは省略)

4. 第1回「幼児教育基礎」講義の内容

a. 自己紹介

講義の最初に、簡単な自己紹介をするための資料として、A4版のプリント1枚を準備した。出典は、栗原の最新刊『学習規律を育てる——崩壊授業の実態と指導の見通し』(近代文芸社、2007年4月10日刊)の奥書である。

以下、講義の録音より、学生に語りかけた形で収録する。ただし、読みやすくするために加筆修正が施してある。

プロフィールを見てください。私の自己紹介を簡単にしましょう。

私は1945年に山口県で生まれました。柳井高校の出身です。柳井高校出身の人はいませんか。たいてい一人、二人はいるのですが。

そして、私は広島大学教育学部の小学校教員養成課程を出ました。そのころ、小学校課程の同級生は140人いました。その140名のうち、130名までが学校の教師になっています。当時は、教師になるのがとても楽だったのです。

(講義の途中で入室してきた学生に「そのへんに居なさい」と指示する。)

小学校や中学校の先生の定年というのは、60歳です。だから、私の同級生で、小中学校の教職についていた人は、すべて退職しているということです。私は、いま満61歳です。ですから、あと2年間、山口大学に居るはずですよ。

私は、いちおう4年間で教育学部を卒業しましたが、そのまますぐに大学院の教育方法学研究室に所属していました。そこで「教育方法学」ないしは「教授学」という、教育実践にいちばん近い学問を研究しました。

教授学は「いかに子どもに教えるか」という学問です。修士課程というのは、2年間ですが、私は落第も含めて3年間ほどいました。じつは、その3年の間に、西日本の「授業が上手だ」という人の授業を実際に参観することができました。恩師の吉本均先生のおかげです。優れた授業実践を見て、理論勉強をすると、「鬼に金棒」です。大学の7年間は、けっして無駄ではありませんでした。

私は1971年の4月、満25歳の年に、広島県安芸郡の府中小学校の教師となりました。

そこで、3年生と5年生を担当しました。その次の年に、広島大学附属小学校の教師になりました。そこで担任したのが、1・2・3・4・5・6年です。同じ子どもたちを連続して持ち上がりました。最後の年に担任した2年生が、とても騒がしい学級の子どもたちでした。1年生のときに学級がとても騒がしかったのです。現代の言葉で言うと、「学級崩壊」を起こしていた学級ですね。その学級を担当しました。厳密に表現すれば「その学級を持たされました」でしょうか。

私は、教育実践に近い本を何冊か書いていますが、プロフィールには、3冊目として、『騒がしい学級の授業指導』(1987)という本があるでしょう。おかげで、その本が書けたのです。騒がしい学級を持たせてもらったからです。

35歳のとき、小学校教師をしはじめて9年目に、肝臓病になってしまいました。それをきっかけに新見女子短期大学の幼児教育の先生になりました。その5年後に山口大学教育学部にやってきました。そして、現在に至るというわけです。

そうですね、このプリントのように、1冊の本の最後に書かれているページ、著者名、本の題名、出版社、出版年(月日)などが明示されているページを「奥書(おくがき)」と呼びます。字は書けますか。本のいちばん最後のページ、つまり、本の一番「奥に書いてある」からでしょうね。つい最近出した本の奥書のコピーですから、最新の私の自己紹介ということになります。

この本が『学習規律を育てる』です。この本の奥書の刊行年月日には「2007年4月10日」と書かれています。ですから、じつは明日の発行ですが、すでに3月30日には私の手元に届きました。その書名の中の「学習規律」という言葉に赤丸を付けておいてください。教育実践を進めていく上で、重要な専門用語です。

この(学生の)中に、小学校の先生になりたいという人はいるのですか。(学生たちの10名ばかりが挙手する。)じつは新任の教師が就職して、数週間しか持たないというのは、この「学習規律」がうまく指導できていないからなのです。新任教師の学級は、だいたい5月の連休までに騒がしくなる傾向があります。そして、1学期末や、2学期になると、もう新任の先生の力では授業が成立しなくなることもあります。学習規律が指導されていないからです。学習規律というのは、「授業参加のためのルールやマナー」です。子どもの側から見れば、「学級の実力」であり、「授業の実力」です。

そこで、思い出してほしいのですが、今日、この講義が始まる8時40分までに、私が「窓を開けなさい」と言って、みなさんに窓を開けてもらったり、「あと2分で授業を始めます」のように、授業始まりの時刻について丁寧に言ったりしたでしょう。窓開けや授業始まりの時刻などは、講義の内容には、まったく関係がないのですが、子どもといっしょに学習環境を整えたり、子どもたちに授業始まりまでの時間や始まりの時刻を意識させたりすることが、じつは「学習規律の指導」の実際なのです。この学習規律についての指導をするかしないかが、のちに授業が成立するかしないかの分かれ目なのです。それは、小学校でも、中学校でも、大学でも同じことなのです。

このような学習規律を育てると、学級が荒れたり、崩壊したりすることがなくなるのです。もちろん、学習規律の指導と並行しながら、学習内容の指導と学習方法の指導を同時に進めなくてはならないのです。

この本の中には、正規の採用ではないが、1年間の講師として採用された学部卒業1年

目の教師の授業についても取材してあります。3月まで教育学部において、4月から小学校2年の学級担任として就職した新米教師です。しかし、1学期半ばには行き詰ってしまい、教育委員会から依頼されて1学期末の7月13日に私が授業を参観することになったのです。そして、目の前の学級を、どのように指導したらよいかを教示したのです。

さらに、学級が荒れて困っているのは、新任の先生だけではありません。経験年数20年以上の先生でも、同じような小学校2年生の学級で困っている例もあるのです。(定年をむかえる60歳教師の教室でも、荒れることがあるのです。)子どもたちの学級が荒れるというのは、子どもたちのせいではありません。もっぱら先生の指導力の問題なのです。

私はたくさんの現場の授業に立ち会います。先生の「授業指導力」というのは、授業始まりの子どもの様子と、その時の先生の行動と、学級の教卓や机の配置を見れば、ほとんどのことが分かります。荒れている、崩壊している学級の多くでは、「遅刻・私語・忘れ物」といった新任教師の悩みが、克服されないままに残っていることが多いのです。私は、そんな本も書いているのです。

遅刻した人、すぐに来てください。

要項が足りないので、すみませんが、後ろに立っておいてください。いつもは40名くらいなのですが、今年は多いようですね。すみません。準備できませんでした。あと、この講義が終わったら、すぐに私の研究室に来てください。

この授業は定刻に始めますので、気をつけてください。

プロフィールの途中でしたね。1977年から1979年までの3年間、私は恩師の吉本均先生との連名で、広島大学教育学部の「教授学講義」を担当しました。いわば「授業指導入門」にあたる講義です。吉本均先生という方は、日本教育方法学会の会長もされた先生で、日本の教育方法学のリーダーでした。この吉本先生とお出会いできて、生涯通用する教授学の言葉(logos)と論理(logic)を教えていただいたからこそ、今でもなお、私は小学校でも大学でも元気に「実践的な教育研究」をしつづけることができたのです。

連名ということでしたが、実際は、すべて私が講義させてもらいました。大変な勉強をさせてもらいました。いちばん良く学ぶための方法は、「人に教えることだ」と、今では自信を持っていうことができます。つまり、教師というのは、いつも一番多くを学ぶ立場にいるということです。

プロフィールの最後になりますが、2003年6月には、日本生活科・総合的学習教育学会の第12回全国大会を山口県の萩市で開催しました。そのときの大会会長を務めたことも、私にとっては楽しい仕事の一つでした。

(テキスト『マー君の散歩道』の使用についての経過説明は省略。)

自己紹介は、このくらいにしておきましょう。

b. 受講上の注意

そのつぎに、この講義の「受講上の注意」をいたします。

いま、教室のうしろで立っている人、本気で聞いてください。このことが守られていないから後ろに立っているわけですからね。いいでしょうか。

要項の中の「1. 受講上の注意、講義の始めに」を見てください。

①この講義の受講者は教職を志望している学生であることを前提に、講義をします。
教育の現場では、真面目さ、熱心さ、誠実さも「教師の実力」のうちです。

いずれ教師になる人が聴いてくれているものと思って、この講義をしようと思います。ですから、そうでない人は、できれば受けないでください。そうはいつでも、卒業するための必修の単位だとか、必要な単位というのがありますから、その人は受講してください。

あとから話そうと思ったのですが、ここで「志」ということについて話します。

「志」というと、すぐに「青年よ、大志を抱け」とか、「青雲の志」などのように、特別な何かや、自分からは遠いことを思い起こします。「志」というのは、特別なときにだけ大切になってくるものではありません。

「志(こころざし)」とは、「心指し」です。要するに、「こころざす(志す=心指す)」とは、あなた方の心が、ほかでもない現在の時点で、どこを向いているかということです。教育学部に所属して「教師を志す」とは、本当に先生になりたいと思いつづけて4年間を過ごすのかどうかということです。

この3月に大学院を卒業していった宮崎出身の竹下さんという学生がいました。その方は、もう学部の3年生になるときから「授業をきちんと指導できる先生になりたい」という「志」を抱いて、大学院修了までの4年間を、とくに頑張りました。そして、「小学校における授業成立の理論と実践 — 授業における内容・方法・規律の指導」という、素晴らしい修士論文を書いて卒業していきました。じつを言いますと、その修士論文の一部が、さきほど紹介しました拙著『学習規律を育てる』の中に収録してあるのです。(注2) 学生時代に自分の書いた論文の一部が、活字になって1冊の本の中に収録されて、公になるということは、素晴らしいことです。

最初に言いましたが、講義を受けるときに、できたら教室の前に座りなさい。できるだけ前に座りなさい。いずれ詳しく話しますが、教職に就くためには、教員採用試験というのがあります。試験のために、何度も受験生が集まる機会があるのですが、そのときにも、できるだけ前の席に座ることをお勧めします。切実感の問題です。

山口大学教育学部に在籍しているからといって、そのまま、すぐに教師として就職できるわけではありません。ここ数年の実績から言えば、5～10%で、非常に少ないのです。

リアルな数字を言っておきましょう。教育学部生の就職先というのは、幼稚園、保育所、小学校、中学校などの教育関係から一般の企業や公務員などと幅広いのですが、「小学校教員への就職者数」で見ておくと、年度ごとに比べたり、他大学と比較するときに、便利なのです。たとえば、山口県では、この4月から小学校に就職した人数でいうと「80人」の募集がありました。教育学部生のうち、およそ100人の教職への希望者があるとして、そのうちストレートで合格した人は5人や10人という数字ではなかったかと思います。多目に見積もっても、希望者10人に対して、正式採用の合格者は1名というような割合なのです。この講義の受講者50名が受験したとすると、5名しか正教員になれないのです。

山口大学というのは、総合大学ですから、その弱点が出ていると思えてなりません。あなた方の先輩たちの中に、パンやおやつを食べながら、ジュースを飲みながら歩いている人を見かけます。私は、そんな学生を見たら、すぐに注意をするようにしています。なにしろ私も教育学部の教員ですからね。あるとき、私が、タバコを吸いながら歩いている大

学院生に「それは、まずいぞ！」と注意したら、素直に「すみません」と謝ってくれました。それを見ていた教育学部の先生が「榎原先生、注意されるんですか」と、驚いた表情で言われました。私は、教育学部教員の給料の中には、それも入っていると思っています。

残念ですが、今の教育学部は、学生もですが、先生も、世間の常識から見てもずれているのです。周囲がそういう様子ですから、本当に自分が教職に就きたいと思ったら、皆さん自身の心が「どちらを向いているか」にかかっているのだと考えた方がいいのです。

ついでに言いましょう。教員採用試験というのは、山口県あたりで言えば、だいたい5倍や10倍くらいの難関だと思っておけばよいでしょう。1997年までは、山口大学の教育学部を卒業して教員採用試験を受ければ、ほとんどの人が合格していました。ということは、97年までに教師になっている人は、採用試験が容易なものですから、必ずしもきちんとした授業指導力を持っているとは限らないということでもあります。97年から、ここ10年くらいは、とても合格するのは難しいのです。私の研究室の卒業生で、いちばん長くかかった人は、卒業して8年目に、やっと合格しました。30歳のときでした。1回受験して落ちたからといって諦めないで、何度も挑戦することが必要な時代だと考えてください。

ですから、そのような実情に社会の方が対応して、受験できる年齢も28歳から35歳になっています。中には、都市部で、50歳以上でもかまわないという条件の採用もあります。

現場の先生方の授業を見ますと、まさに学力と人柄（人間力）があらわれます。といっても、そのまま教科の授業の中で道徳教育をするというのではなくて、小学校教師は算数・国語・社会・理科・生活・音楽・図画工作・家庭・体育などの学習内容の理論や教科教育の方法も知っておかなくてはならないのです。ピアノも、ある程度で弾ける方が望ましいし、水泳も指導できなくてはならないし、図画工作の授業も指導できなくてはならない。もちろん、特別活動も、総合的な学習も指導できなくてはいけません。けっこう多彩な学力や指導力を求められるのが、小学校の先生なのです。

②講義は定刻に始めます。

そして、なるべく定刻までに終わることを心がけます。ご協力ください。

③講義中の私語は厳禁です。もちろん、講義中の携帯電話も、厳禁です。

気付いたら、注意もします。

④毎回、かならず講義要項を配布します。

授業開始前に、必ず自分の手で受け取ってください。

今日、講義要項を配りましたが、「2枚ください」という学生がいました。しかし、私は「自分で取りにくるように言ってください」と伝えて、その学生に1枚だけ渡しました。

この「手渡し」には、いろいろな意味が込められています。人間は、遠い席に座ると、先生とも遠くなるのですが、先生の話す講義内容とも遠くなるのです。近いと、話す中身とも近くなるのです。

講義要項を受け取るために、ここに来ると、どういうことがおきるかという、今日も13番目の人だった思うのですが、ここに来て「おはようございます」という挨拶をし

した。そして、講義要項を受け取ると、「ありがとうございました」と言いました。人間というのは、近くなると礼儀も重んじるし、人間的なコミュニケーションが始まるのです。

反対に、大きな教室でうしろに座って、要項を取りにくる必要がないときには、講義の始めに教室の後ろから入って、講義が終わると後ろから出てしまうことになります。教師との距離が、10～15 m以上は近くならないという場合も出てきます。それは、先生の話(講義内容)とも10 m以上の距離があるということです。

そのような受講態度の「後ろの席の4年間」と、教室の前方で講義を聞く「前の席の4年間」とでは、明らかに違いが出てくるのではないのでしょうか。

⑤要項末尾の「ミニレポート欄」にナンバリングがしてあります。

この数字は、ぜひとも自分で、自分の生活に生かしてください。

ミニレポートを見てください。「1」から「45」くらいまでの数字が、ミニレポートの隅っこに書いてあるでしょう。それが、あなたが今日、この教室に入った順番の番号です。もともとは、私が出席者数を把握するための番号ですが、おかげで、8時30分には15名の学生がこの教室に入っていて、8時35分には32名、定刻の8時40分には、44名の人が座っていたと思います。ということで、何人の受講者でこの授業がスタートしたとか、遅刻したのは何人かということが、即刻、把握できます。また、一人一人の名前を読み上げて出席をとるといった無駄をしなくてもすみます。

ということは、この授業では、出席を重視するということです。15回の授業のうち、だいたい9回、つまり6割の出席がないと単位はないと思ってください。その9回も、1回でも遅刻があったら、6割には足りないから、単位はないと思ってください。

私の講義で、真面目に出席していて、単位がなかったという人はありません。それどころか、優や秀がつく人がけっこう多いのです。(優良可、秀についての説明は略。)

近年では、この授業を受ける学生を見るかぎり、講義への出席率が高くなって、真面目に勉強する人が多くなったように思います。幼児教育の学生の中にも、「可」は全くなくて、ほとんどが「秀」という成績の人もあります。そういう人は、きちんと勉強したということですから、きちんとしたところに就職できています。就職というのは、出口の問題ですが、今日は入学して第1日目の、入り口の講義ですが、ありのままを言っておきたいと思います。このごろ流行の「自己責任」というのは、まさに、このことでしょうね。

大学というところは、学生の自主性をとても大事するところです。講義に遅刻しようと早く来ようと、だれも文句も言いませんし、褒めもしてくれません。だから、「自分の力で自分を創らないといけない」ということでしょう。4年間を過ごしたあとの「結果責任」は自分自身にあるということです。

すごいのは、講義を受けないだけでなく、積極的に講義をサボって遊んでもいいし、下に落ちる自由さえ、つまり墮落する自由さえも保障されているのが、大学という場所なのです。よほど自分がしっかりしていないといけないのが、大学という場所なのです。

ミニレポートの隅っこの数字は、できたら自分で、自分の生活のために生かしてください。8時30分までには来るとか、人のために窓を開け、蛍光灯を点け、ブラインドを調整する、なども考えてみてください。

仕事のできる人は、朝が強いですからね。エグゼクティブと呼ばれる人は、部下よりも朝早く来なくてはならないのです。何年も前に、確か『アエラ』という週刊誌で読んで覚

えているのですが、ニューヨークに入る早朝の特急列車は、郊外に住むエグゼクティブのためのものようですね。エグゼクティブたちが早朝の始発の指定席に乗って早く会社に着いて、一般社員の勤務開始前に会議を済ませておくというのです。そのあと、遅く家を出た一般社員がラッシュの列車に乗って、疲れて会社にやってくるというわけです。朝の時間というのは、使い方によれば、それほど生産的で大切な時間なのです。

⑥毎回、ミニレポートを提出してもらいます。

定刻から受講し、レポートを提出して、1回の出席と見なします。

⑦今年度は、「講義ノート」の提出を課します。

ノートのとり方、資料の整理の仕方なども、工夫してみてください。

それは、勉強の仕方、研究の仕方にも通じます。けっこう奥が深いですよ。

* 栗原の『教養部 講義録』(1965)をお見せしましょう。

7番目は、二重丸をつけておいてください。あなた方が、講義を聞いて、どんなノートを創ったかというのを見せてもらいます。

例年の講義ではしたことのないことですが、今年の講義では、ぜひとも、全員にノートの取り方、在り方を深く考えてほしいと期待しています。

それでは、私の『教養部 講義録』(1965)をお見せしましょう。

これです。私は昭和39年(1964年)の4月に大学の1年生になりました。そして、64年度と65年度の2年間は、「教養部」といって、今でいえば「共通教育」に相当する一般教養を身につける期間を過ごしました。このあと、専門の教育学部へ進学したのです。

講義に出ないこともありましたが、全部で693ページの1冊の本が出来上がりました。講義をされる先生方が配布してくださるプリントや冊子なども入っていますので、簡単に、この厚さになってしまうのです。(講義の内容についての説明は省略。)

大学2年生が終わるときに、必要なものだけを残して整理して、ページを打って、広島大学の附属図書館で製本をしてもらったのです。このように製本しておく、もう40年も過ぎるというのに、きちんと残すことができるのです。

ついでの話ですが、私の研究室には、小学校の教師として過ごした9年間の「実践記録」が、すべて製本して残してあります。全部合わせると、私の身長2倍くらいになります。小学校教師としての9年間は、何月何日に、どのような授業をしたかなどのプリントやメモ、その日の学級通信なども、すべて収録してあります。

c. 「幼児教育基礎」オリエンテーション

つぎの「幼児教育基礎」オリエンテーションも、少しやっておきましょう。

この「幼児教育基礎」の講義を受けるということは、幼児教育についての専門的な知識を習得して、専門的な論理を学ばないと意味がないのです。専門家というのは、専門用語を持っている人のことであり、専門の用語と論理を駆使して一般社会の普通の人にはできない仕事をする人のことです。

幼稚園の先生や小学校の先生の仕事といえば、相手が小さな子どもであるからという誤解からでしょうか、簡単に、その仕事ができると思っている人が多いですね。とくに教育

学部に来ている学生は、そう思っている人が多いと思います。たとえば、自分は小学校のときに教科の学習の成績が良かったから、きっと先生の仕事は簡単にできると誤解しているのです。そういう私も、学生時代には、そう思っていました。

ところが、この世界に入ってみるとは、自分の体験だけでは、まっとうな仕事を進めることはできません。教育の仕事を進めるためには、まさに教育についての、あるいは授業についての「専門の言葉」と、「専門の論理」が必要となってくるのです。

そこで、「学問するとは」のところを説明しましょう。

学問するということは、ロゴス（言葉）が使えないといけません。あなた方や私で言えば、ロゴスとは、今、この時も使っている日本語のことです。まずは、日本語の読み書きの基本を知らなくてはなりません。プロとなるためには、まずは日本語が思いどおりに使えなくてはなりません。さらに、英語やドイツ語などの外国語が使えはじめ、上達すると、じつは、ますます日本語が上達し洗練されてくるのです。そう考えると、共通教育で取り組んでいる外国語学習にも、力が入りますね。その上で、「教育のロゴス」を駆使して、「教育のロジック」を学ぶこと、これが「学問する」ということなのです。

そして、ぜひとも学生のうちに、おしゃべりになってください。それも、学問の言葉や論理を日常的に話すことのできる人になってください。教育の言葉と論理を駆使できる人になること、それが「教育のプロ」になるということです。そして、同級生や先輩、現場の先生、大学の先生とも、大いに語り合うことです。これが、「学問する」ということです。

テレビ番組でやっているような、単なる流行や常識的な物言いや、乱雑な言葉使いでは、教育のプロの世界では通用しないのです。だからこそ、本気で専門の講義を聞かなくてはならないし、講義から出発して、ほかのたくさんの本を読むことも必要となってくるのです。

以下、「大学の学習規律（2）」につづく。

注

1) 栗原昭徳著『学級における授業の成立』（明治図書、1982年）や、最近では『学習規律を育てる——崩壊授業の実態と指導の見通し』（近代文芸社、2007年4月）などで詳述している。

2) 栗原昭徳著『学習規律を育てる——崩壊授業の実態と指導の見通し』（近代文芸社、2007年4月10日刊）中の「第3章 学習規律の類型（竹下真生・栗原昭徳）」。